

P L病院 医療の質指標（Q I）

当院は医療の質の改善と向上を目的に、2014年度から日本病院会Q Iプロジェクトに参加し、医療の質指標（Q I：Quality Indicator）を集計しています。

【日本病院会Q Iプロジェクトについて】

日本病院会Q Iプロジェクトは「医療の質の評価・公表推進事業」です。参加施設は自院の医療の質指標（Q I）データを集計し日本病院会に提出します。そして、集まったデータは日本病院会で集計し参加施設にフィードバックされます。

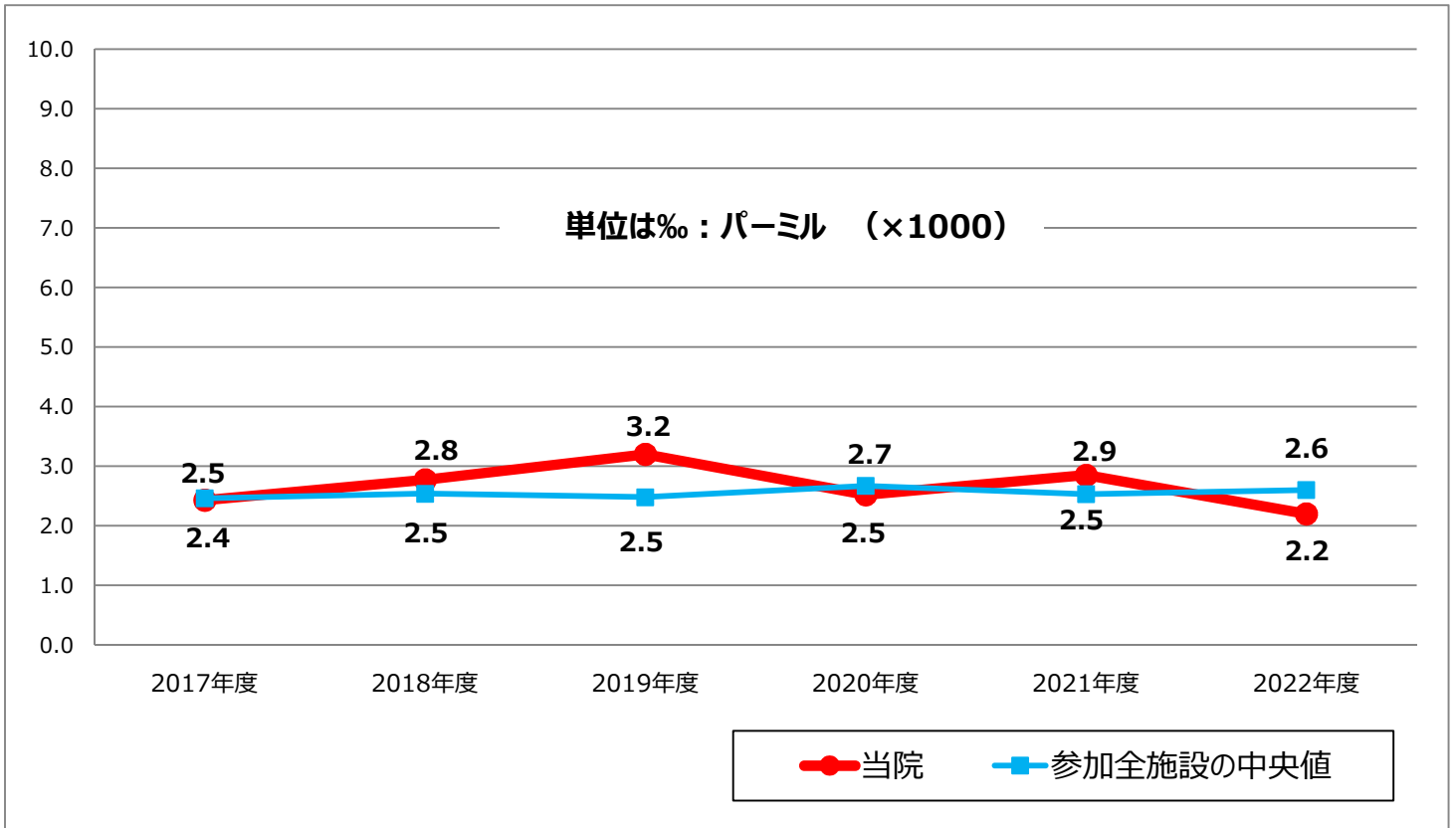
【2022年度集計結果について】

2022年度は353施設がこのプロジェクトに参加しました。数ある指標の中から今回は9指標のデータを掲載しておりますので、ご参照いただければと存じます。

今後も職員一同、引き続き患者様により良い医療を提供できるよう、医療の質改善・向上に力を合わせていく所存です。

入院患者の転倒転落発生率

低い値が望ましい指標



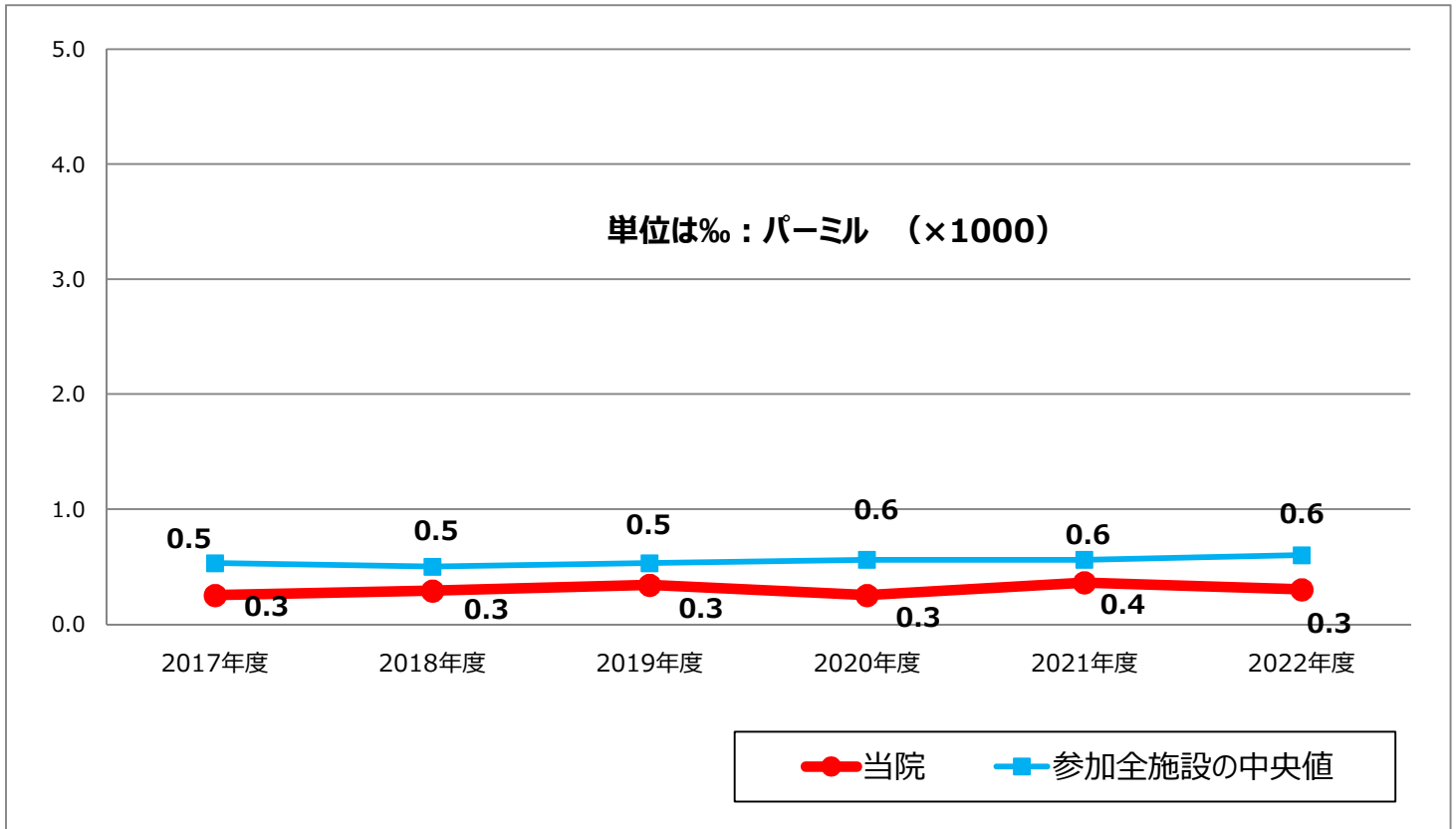
算出方法： 分子 医療安全管理室ヘインシデント・アクシデントレポートが提出された入院中の転倒転落件数
分母 入院患者延べ数

2022年度当院は「2.2‰パーミル（分母72513名、分子162件）」となり、参加全施設の中央値より低くなりました。転倒転落リスク評価から予防対策を講じることができたと考えられます。転倒転落には、入院による環境の変化、疾患や病態によるADLの低下など様々な要因が関連しています。

転倒転落を起こさないために身体抑制など行動制限をかけることは、せん妄やADLの低下の誘因となる可能性があります。そのため転倒転落を「0」にすることは困難です。患者様やご家族に、転倒転落を起こしやすい状況であることをご説明・ご理解いただいたうえでご協力いただき、予防対策を引き続き行っています。

入院患者の転倒転落発生率（損傷レベル2以上）

低い値が望ましい指標



算出方法： 分子 医療安全管理室へインシデント・アクシデントレポートが提出された入院中の転倒転落件数
のうち、損傷レベル2以上の件数
分母 入院患者延べ数

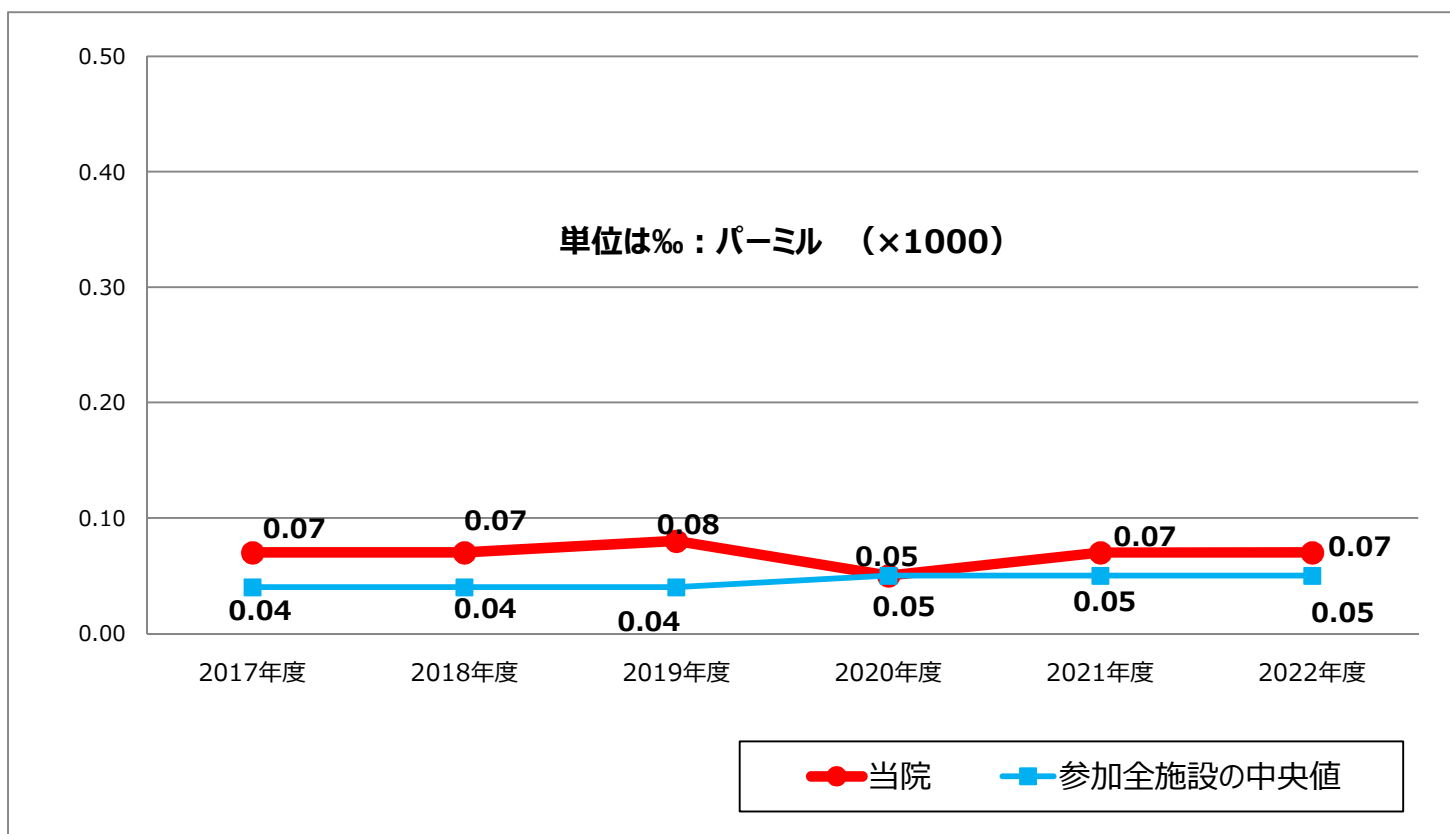
| 損傷レベル | インシデント影響度分類 | 説明 |
|-------|-------------|---|
| 1 なし | 0、1、2 | 患者に損傷はなかった |
| 2 軽度 | 2または3a | 包帯・氷・創傷洗浄・四肢の挙上・局所薬が必要となった、あざ・擦り傷を招いた |
| 3 中軽度 | 3a | 縫合・ステリー・皮膚接着剤・副子が必要となった、または筋肉・関節の挫傷を招いた |
| 4 重度 | 3b/4a/4b | 手術・ギプス・牽引が必要、または骨折した、または神経損傷・身体内部損傷のため診察が必要 |
| 5 死亡 | 5 | 転倒による損傷の結果、患者が死亡した |
| 6 UTD | | 記録からは判定不可能 |

2022年度当院損傷レベル2以上は「0.3‰パーミル（分母72513名、分子19件）」でした。

損傷レベル2以上の発生率が参加全施設の中央値より低いことから、患者様の情報を共有し、環境整備やケアの実践が適切に行われているといえます。

入院患者の転倒転落発生率（損傷レベル4以上）

低い値が望ましい指標



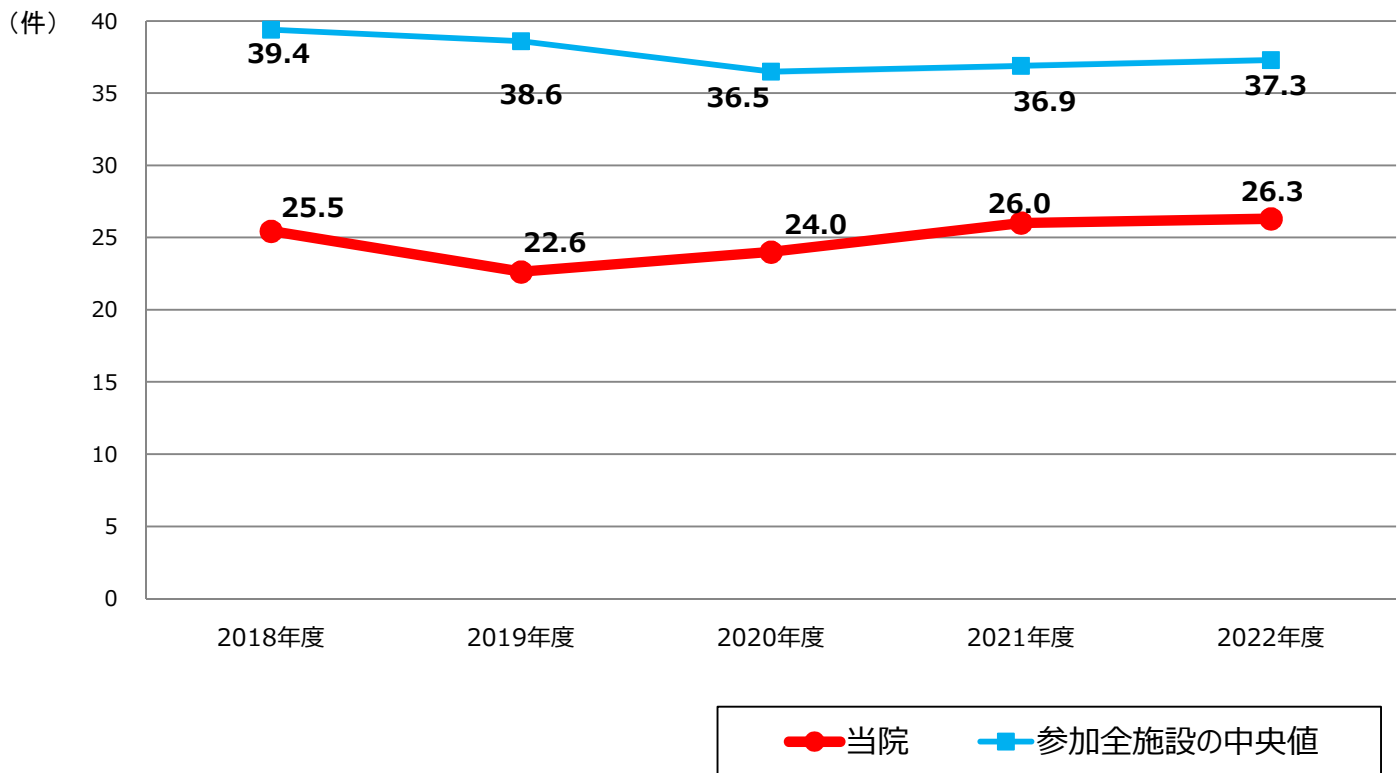
算出方法： 分子 医療安全管理室ヘインシデント・アクシデントレポートが提出された入院中の転倒転落件数
のうち、損傷レベル4以上の件数
分母 入院患者延べ数

2022年度当院損傷レベル4以上は「0.07‰パーミル（分母72513名、分子5件）」でした。

損傷レベル4以上は、患者の生活や生命に大きく影響することから目標を「0」としています。退院間近のADLが変化してきている時や入院してすぐなど環境に慣れない状況で発生しています。損傷レベル4以上は、転倒転落事故防止対策チームが病棟と連携し対応を行っています。

1か月間・100床当たりの入院患者に関する インシデント・アクシデント報告件数

高い値が望ましい指標



算出方法： 分子 調査期間中の月毎の入院患者様に関するインシデント・アクシデント報告件数×100
分母 許可病床数

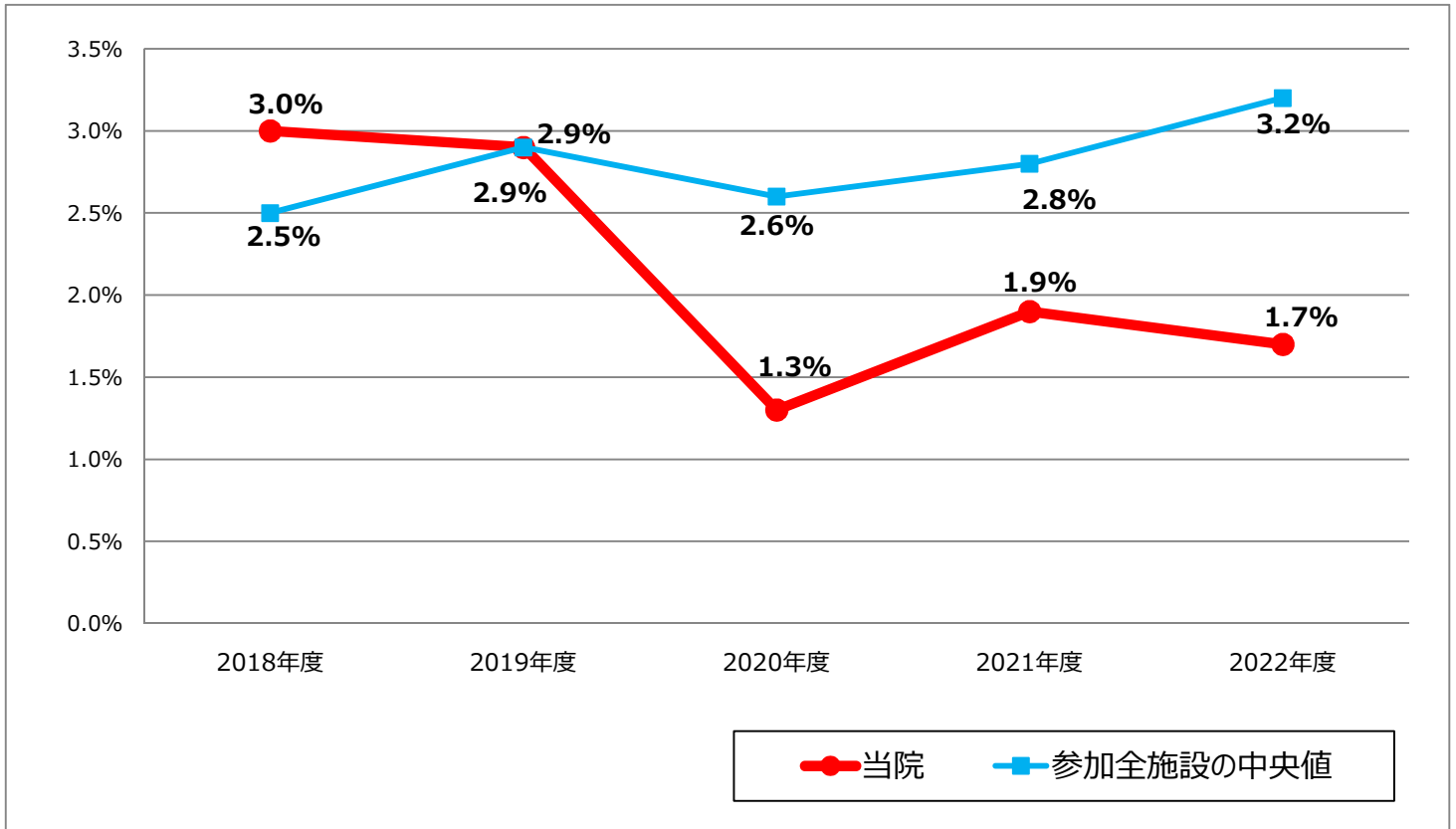
【単位：100床あたり】

インシデント・アクシデントレポートの発生報告で、何が起きているのか情報を得ることができます。情報を共有することで再発防止につながります。未然防止できた情報（状況など）を共有することで改善策につながります。インシデント・アクシデントレポート作成に手間がかかるという声があり、2021年度から入力しやすいシステムに変更しました。2022年度当院の報告件数は1168件でした。

より質の高い安全な組織を目指していきたいと考えています。

入院患者に関するインシデント・アクシデント報告書中、 医師による報告の占める割合

高い値が望ましい指標



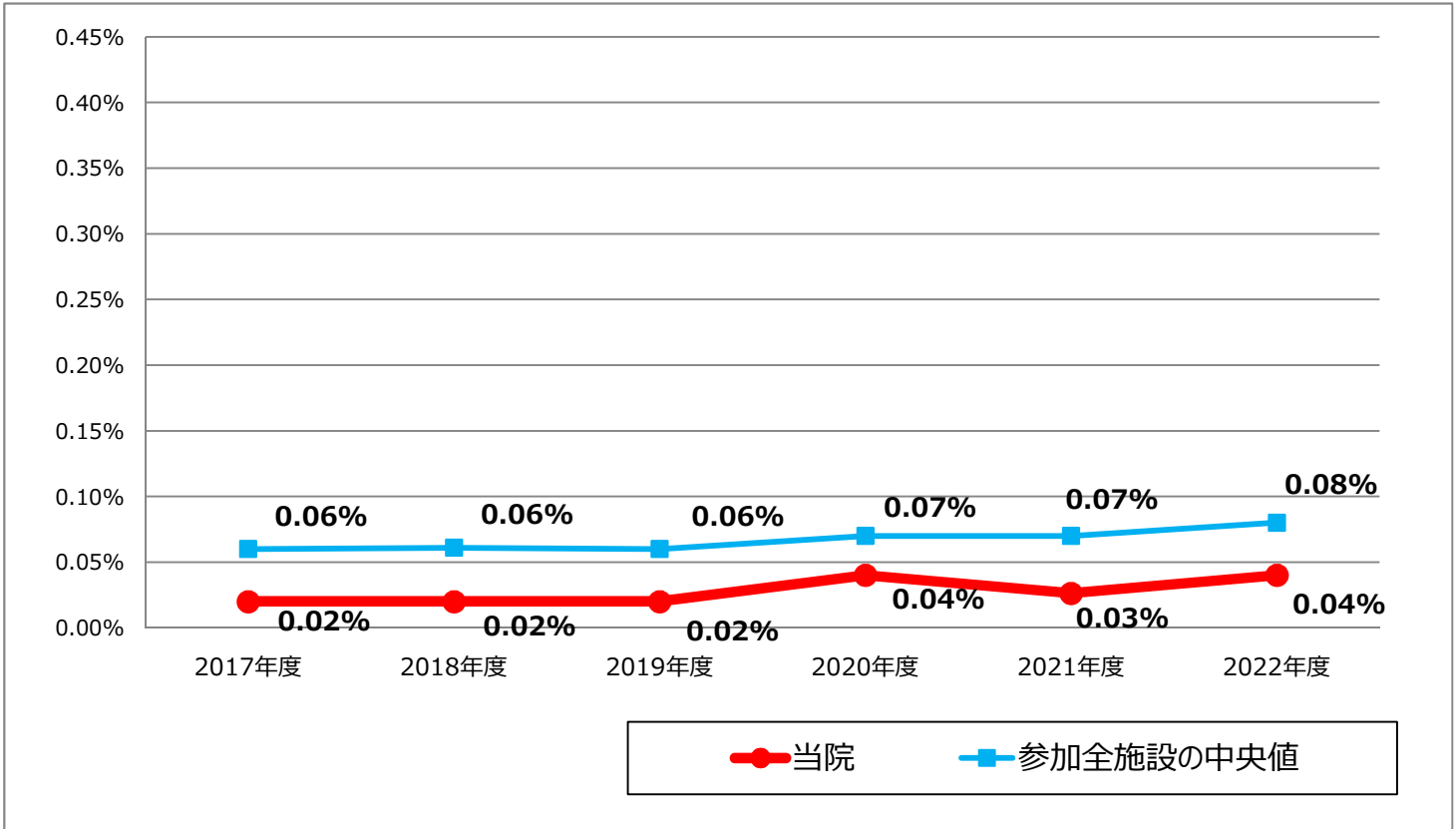
算出方法： 分子 分母のうち、医師が提出したインシデント・アクシデント報告書の件数
分母 調査期間中の月毎の入院患者様に関するインシデント・アクシデント報告件数

2022年度当院は1168件の報告件数があり、そのうち医師の提出は20件でした。

医師による報告数は全体の5%以上を目標としています。例えば指導医師が臨床研修医のヒヤリ・ハット事象などに気づいたときは、研修医教育などの振り返りのためにも、臨床研修医に報告入力を促すようにしています。

褥瘡発生率

低い値が望ましい指標



算出方法： 分子 d2（真皮までの損傷）以上の院内新規褥瘡発生患者数
 分母 入院延べ患者数（同日入退院患者・褥瘡持込患者・調査月間以前の院内新規褥瘡発生患者を除く）

褥瘡は患者様のQOL（生活の質）低下をまねき感染を引き起こすなど、治癒まで長かかることで在院日数長期化や医療費増大にもつながります。この指標は、入院時すでに褥瘡があったり、調査期間より前に褥瘡の院内発生が確認され継続入院している患者様を除くことで、下表のd2以上の褥瘡が新たに院内発生した割合を見ています。当院2022年度は0.04%（分母72357名、分子28名）でした。

当院は各部署のスキンケア褥瘡リンクナースや褥瘡対策委員会を中心に、患者様の褥瘡新規発生を予防する努力を継続しており、その結果参加施設の中央値より低い割合を維持できています。

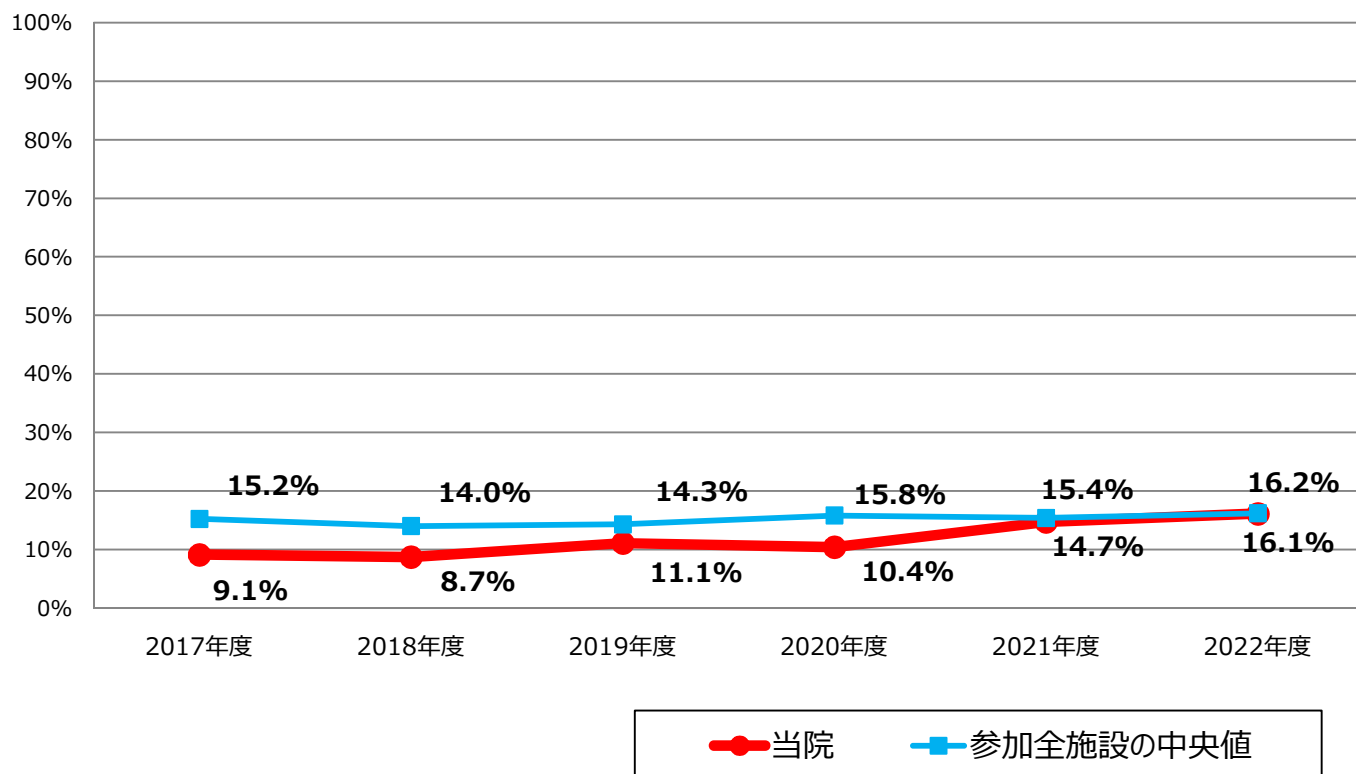
日本褥瘡学会 2020年改定DESIGN-R Depth（深さ）

| Depth(深さ) | 内容 |
|-----------|------------------|
| D0 | 皮膚損傷・発赤なし |
| D1 | 持続する発赤 |
| D2 | 真皮までの損傷 |
| D3 | 皮下組織までの損傷 |
| D4 | 皮下組織を超える損傷 |
| D5 | 関節腔、体腔に至る損傷 |
| DTI | ※深部損傷褥瘡（DTI）疑い |
| U | 壊死組織で覆われ深さの判定が不能 |

※深部損傷褥瘡（DTI）疑いは、視診・触診、補助データ（発生経緯、血液検査、画像診断等）から判断する

尿道留置カテーテル使用率

低い値が望ましい指標



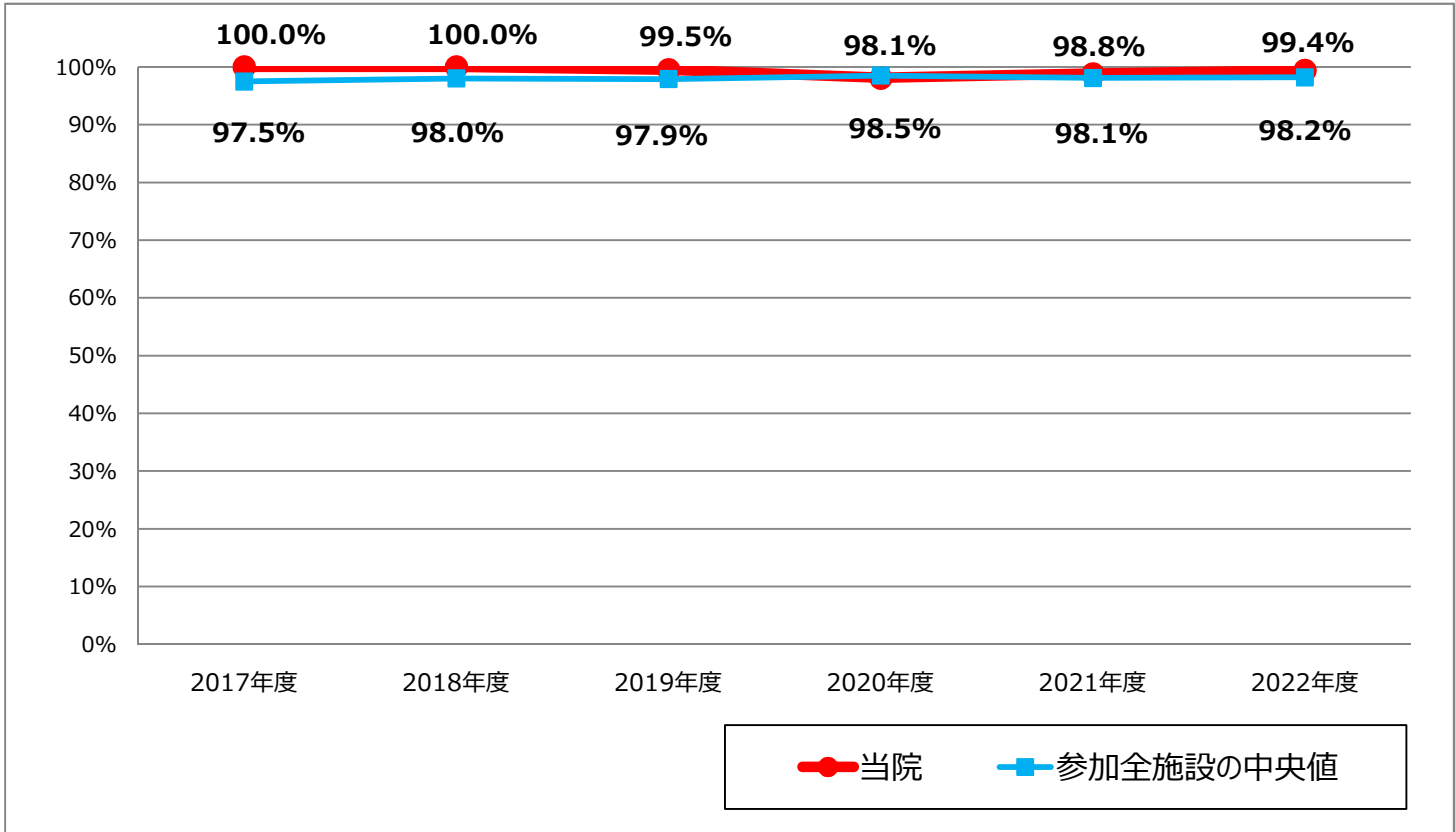
算出方法： 分子 尿道留置カテーテルが挿入されている患者延べ数（使用日数）
包含：自院での挿入有無に関わらずカテーテル留置されている患者
除外：恥骨上膀胱留置カテーテル、コンドーム型カテーテル、間欠的な導尿目的の
カテーテル挿入、洗浄目的で挿入された尿道留置カテーテル
分母 入院患者延べ数

尿路感染は院内感染において、頻度が高い感染症であり、その大部分は尿道留置カテーテルが原因となります。尿路感染は重症化することが少なく、尿道留置カテーテルの抜去により治癒します。そのため、軽視される傾向にありますが、リスクの高い重症な患者様においては、腎盂炎や敗血症に至ることがあり、決して軽視してよい感染症ではありません。使用比の低減は尿路感染の低減に繋がります。適正に使用し早期に抜去することで尿路感染を防止できます。

本院の使用率は参加施設の中央値とほぼ同等です。これまで参加施設より低く経過していましたのでさらに対策を講じて、より低くなるように改善活動を実施していきたいと思っております。

予防的抗菌薬投与率

高い値が望ましい指標

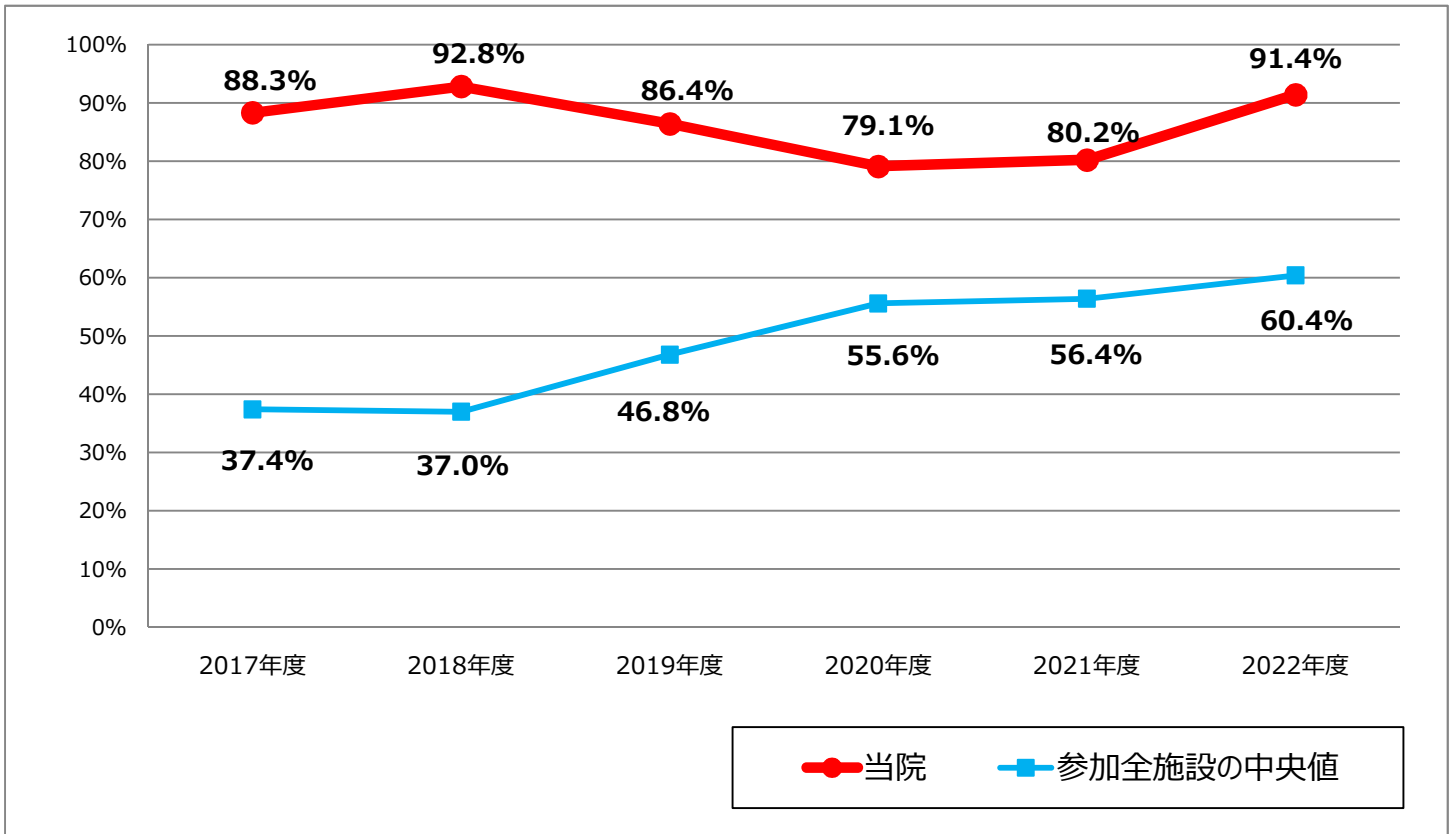


算出方法： 分子 手術開始（皮膚切開時刻）前1時間以内に予防的抗菌薬が投与開始された手術件数
分母 7つの特定術式（冠動脈バイパス手術、その他の心臓手術、股関節人工骨頭置換術、膝関節置換術、血管手術、大腸手術、子宮全摘除術）の手術件数

注射薬だけでなく内服薬も抗菌薬の対象としています。手術開始前1時間以内に予防的抗菌薬を投与することで、術後感染症の発生率を下げることができ、入院期間の延長や医療費の増大を抑えることができます。達成率が90%を超える施設は十分に質の高い医療を提供できていると考えられています。当院は手術室で徹底管理することにより、ほぼすべての症例で1時間以内の投与を達成できています。

予防的抗菌薬投与停止率

高い値が望ましい指標



算出方法： 分子 術後24時間以内に予防的抗菌薬投与が停止された手術件数
(冠動脈バイパス手術またはそのほかの心臓手術の場合48時間以内)
分母 4つの特定術式 (冠動脈バイパス手術、その他の心臓手術、大腸手術、子宮全摘除術)
の手術件数

注射薬だけでなく内服薬も抗菌薬の対象としています。抗菌薬を必要以上に長期間投与することは、耐性菌発生リスクや薬剤副作用リスクの増大、ひいては医療費の増大につながります。

一般的に、非心臓手術では術後24時間以内、心臓手術では術後48時間以内までに抗菌薬の投与を中止することが推奨されており、当院は非常に高い水準を維持しています。